

## 農業の魅力、再発見

谷口吉光（秋田県立大学）

地域の食生活と農業がこの先もずっと続いていってほしい。それは能代・山本地域に住むすべての人々の願いでしょう。そのためにはどうしたらいいか。人口流出や高齢化の厳しい現状を見ると、途轍もなく難しい課題だと思うかもしれませんが、私は必ず答えがあると信じています。必要なのは広い視野を持つこと、現実をよく知ること、そして柔軟な発想を鍛えることです。このコラムで少しずつ考えていきましょう。

今回のテーマは「農業の魅力」。農業関係の人たちに話を聞いて驚くのは、「農業は儲からない」「希望はない」と思っている人がとても多いことです。一例として、若い女性Aさんの話を紹介します。Aさんの家は米農家。でも彼女は家を継ぎたいとは一度も思わなかったそうです。

「うちの両親が農業の愚痴ばかりいうからかもしれないけど、もうちょっとやりたいて思える農業だったら私もやりたいて思えたかも。両親に『ネット通販で米を売ろうよ』って言ったことがあったんですけど、『そんなのできるわけない。JAに出すしかないんだ』って言われて」

この短い言葉にはたくさんのことが凝縮されています。「農業は辛い」という固定観念や、「自分の力で現実を変えることはできない」という絶望感など。思い当たる人は多いのではないのでしょうか。

しかし、私はAさんのご両親を責める気にはなれません。高度経済成長時代、「都会がカッコよくて田舎はダサイ」という価値観が「時代の病」のように日本中に蔓延しました。60代以上の世代は多かれ少なかれこの熱病に感染したと思います。

「おらの村には何にもねえ。おらこんな村いやだ。東京さ出て行くだ」という吉幾三の歌にみんなが喝采を叫んでいた時代に、「農業は立派な仕事だ。俺は農業に誇りを持っている」と主張することはとても難しかったでしょう。

でも高度経済成長は遠い過去の話になりました。「農業はダサイ」という価値観も若い世代にはそれほど広がっていません。むしろ都会の若者が農業・農村に憧れて移住する「田園回帰」という潮流の方が時代の方向を示していると思います。

確かに、農業は身体を使って土にまみれる仕事です。でも農業関係者が二言目には「農業は厳しい」「農業は大変だ」と言うのは明らかに時代錯誤です。昭和の熱病の後遺症です。現実には儲かっている農家もいれば、楽しく農業をしている農家もいます。その方向にもっと目を向けませんか。

短歌には枕詞がありますが、農業の枕詞を変えてみませんか。「農業はおもしろい」「農業には可能性がある」。きっと新しい風が吹き始めると思いますよ。

（北羽新報「トランジションの風」 2017年8月23日掲載分に加筆・修正した）